

答えはすべて解答用紙に書きなさい。

平成三十一年度 桜蔭中学校入学試験問題 [国語]

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今、私たちは経済的な時間を生きている。そして、自分が自由に使える時間を欲しがっている。しかし、自分の時間とはいったいどういう状態のことをいうのだろうか。それをどうすごしたら、幸せな気分になれるのだろうか。

どこの世界でも、人は時間に追われて生活している。私がゴリラを追って分け入ったアフリカの森でもそうだ。晩に食べる食料を集めに森へ出かけ、aアサツテに飲む酒を今日仕こむ。昨日農作業を手伝ってもらったので、そのお礼として明日ヤギをつぶす際に肉をとり分けて返そうとする。それは、つきつめて考えれば、人間の使う時間が必ず他者とながっているからである。

①時間は自分だけでは使えない。ともに生きている仲間の時間と速度を合わせどこかで重ね合わせなければならぬ。だから、森の外から流入するbブッシや人の動きに左右されてしまう。

ゴリラといっしょに暮らしてみても私が教わったことは、互いの存在を認め合っている時間の大きさである。野生のゴリラは長い間人間に追い立てられてきたので、私たちに強い敵意をもっている。しかし、辛抱強く接近すれば、いつかは敵意を解き、いっしょにすることを許してくれる。それは、ともにいる時間がケイカするにしがたい、信頼関係が増すからである。

ゴリラたち自身も、信頼できる仲間といっしょに暮らすことを好む。食物や繁殖相手をめぐるトラブルによって信頼が断たれ、離れていくゴリラもいるが、やがてまた別の仲間といっしょになって群れをつくる。とくに、子どもゴリラはcシュウイのゴリラたちを引きつける。子どもが遊びにすれば、大きなオスゴリラでもよるこんで背中をdカすし、悲鳴をあげればすつ飛んでいつて守ろうとする。ゴリラたちには、自分だけの時間がないように見える。

人間も実はつい最近まで、自分だけの時間にそれほど固執していなかったのではないだろうか。とりわけ、木や紙でつくられた家に住んできた日本人は、隣人の息遣いから完全に隔絶することはできず、常にだれかと分かち合う時間の中で暮らしてきた。それが原因で、うつとうしくなったり、ストレスを高めたりすることがあったと思う。だからこそ、戦後に高度経済成長をとげた日本人は、他人に邪魔されずに自分だけで使える時間をひたすら追い求めた。そこで、効率化や経済化の観点から時間を定義する必要がある。つまり、時間はコストであり、金に換算できるといって考え方である。

しかし、ブッシの流通や情報技術の高度化を通じて時間を節約した結果、せっかく得た自分だけの時間をも同じように効率化の対象にしてしまった。自分の欲求を最大限満たすために、効率的な過ごし方を考える。映画を見て、スポーツを観戦し、ショッピングをたのしんで、ぜいたくな食事をする。自分で稼いだ金で、どれだけ自分がやりたいことが可能かを考える。でも、②それは自分が節約した時間と同じ考え方なので、③いつまでたっても満たされることはない。そればかりか、自分の時間が増えれば増えるほど、孤独になって時間をもてあますようになる。

それは、そもそも人間がひとりで時間を使うようにできていないからである。700万年の進化のeカテイで、人間は高い共感力を手に入れた。他者のなかに自分を見るようになり、他者の目で自分を定義するようになった。ひとりでいても、親しい仲間のことを考えるし、隣人たちのA怒哀Bに大きく影響される。ゴリラ以上に、人間は時間を他者と重ね合わせて生きているのである。仲間に自分の時間をさしだし、仲間からも時間をもらいながら、互酬性にもとづいた暮らしを営んできたのだ。幸福は仲間とともに感じるもので、信頼は金や言葉ではなく、ともに生きた時間によって強められるものだからである。

世界は今、多くの敵意に満ちており、孤独な人間が増えている。それは経済的な時間概念によってつくりだされたものだ。それを社会的な時間に変えて、いのちをつなぐ時間をとりもどすことが必要ではないだろうか。ゴリラと同じように、敵意はともにいる時間によって解消できると思うからである。

(山極寿一『ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」』)

注 1……いだわるい 2……お互いに、してもらったことに対してお返しをし合う関係

問一 □ a e のカタカナを漢字に直して答えなさい。

問二 — 線部の四字熟語は、人間の様々な感情を表しています。[A][B]に入る漢字一字をそれぞれ答えなさい。

問三 — 線部①とはどういうことですか。わかりやすく説明しなさい。

問四 — 線部②について、「それ」とはどういうことを明らかにして、

— 線部③の全体に言っていることを説明しなさい。

問五 — 線部③のように言えるのはなぜですか。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「あなたはどうやって志願したのですか。言えないことはわかっています。それでもどうしてもお聞きしたいのです。決してだれにも言いません。どうか教えてください。」

「冥土の土産に教えてください。」

「伍長とじやーじやみつめあった。ぼくは唾を飲んだ。トーグラから、ぼくカミのあじもあまも顔を出して、ふたりを見ていた。」

「イチミーが死んだときには、軍神として、町を挙げた葬式が行われた。先生に引率されて、学校から生徒みんなで参列した。イチミーに憧れない男子はいなかった。」

カミのあまは手の甲で涙を拭った。イチミーの葬式的时候は、参列者からしきりに「特攻戦死おめでとうございます」と声をかけられながらも、涙の一粒もこぼしていなかったのに。

「申し訳ありませんが、フィリピンの特攻が、どのように編成されたかは知りません」

伍長は a 、ぼそぼそと言うと、頭を下げた。

「ただ、自分のときは、お話しします。指名に先立っては、意思の確認をされました。白い紙と封筒を渡されたのです。志望する場合は、志望と書き、志望しない場合は、白紙で提出せよ、と言われました」

じやーじやは頷いた。

「それでは、あなたは、その紙に志望と書かれたのですか」

伍長は首を振った。

「わたしは、ちようど父を亡くし、戸主になったばかりでした。郷里には、病気の母と、幼い弟妹を残しています」

「では、白紙で出したのですか」

伍長はまた首を振った。

「なぜですか」

じやーじやは目を見張った。

「意思の確認といいながら、白紙で出せば、卑怯者の誹りは、免れません。」

「国賊扱いされ、郷里の家族にも迷惑が、かかります。ただ、わたしの家庭の事情は、上官も知ってくれていました。そこでわたしは、上官が察してくれることに望みを託し、『命令のまま』と書いて、出しました」

「でも、あなたはここにいます。上官は事情を察してくれなかったのですか」

伍長は頷いた。

「やはり、同じような事情があつて、同じことを書いた人間が、何人かいました。また、白紙で出した人間も、いたのです。彼の家は両親を亡くして、お姉さんひとりが、家を支えていました。自分が進学できたのは姉のおかげだと、つねづね言っていた彼は、早く自分が家を支えられるようになって、お姉さんに、幸せな結婚をしてもらうことを望んでいました」

「をうない神はたかさ。ヤマトウでも同じなんだとぼくは思った。」

「それなのに、翌朝、部隊長は言ったのです。白紙は、一枚もなかった、と」

伍長はじやーじやをじつと見た。

「すべて、熱望する、と、書いてあったと」

まるで、じやーじやに救いを求めているようだった。

「それは、嘘ですね」

伍長は小さく頷いた。

「何日かして発表された攻撃隊員名簿には、わたしの名前も、白紙で出した彼の名前も、入っていました。名簿を見て、すぐにわかりました。成績順だと」

伍長はかえって b 話しつづけた。

「わたしたちは飛行経験の少ない空中勤務者ですから、操縦技量の成績のよくないものは、そもそも、沖縄まで辿りつくことができない。意思の確認は、建

ぼくたちが地上にいたから、島に被害を与えないようにしてくれたんだ。だから」

「それはちよつとちがうかもしれない」
伍長はぼくの言葉をさえぎった。

「敵機に発見されたら、海上を飛んだほうが、敵機には見えにくくなるんだよ。緑色に塗つてある翼が、海の色と重なって見えるからね」

伍長の言葉の意味がわかるまで、ちよつと時間がかかった。なんとかのみこめると、ぼくは続けた。

「でも、だって、特攻機はいつも島の上を通らないで、海の上を通っていくよー。もし撃墜されても、島に被害を与えないようにしてくれてるんでしょー。^{注1}越山の兵隊さんが言つてたつて」

「リーダーに捕捉されないよう、低空で飛ぶからね。障害物のない海上のほうが安全なんだよ。もちろん、島に被害を与えたくないというのは事実だけど、不時着する場合は島に降りるしかないしね」

伍長はこともなげに言つた。

「そもそもぼくたちは未熟だからね、正直言つて、そんな余裕はないんだよ。みんな晴れた日にしか飛べないし、ぼくは今回の出撃が初めての長距離飛行だった」

そういえば、特攻機は、晴れた日にしか飛んでこない。

神さまは島を守つていたわけじゃなかった。

「最初で、それで最後の長距離飛行になるはずだったのに」

伍長は珊瑚礁のむこうを見た。

「ぼくはこんなところで生きている」

伍長はそうつぶやくと、ぼくたちをかわるがわる見た。

「ごめんよ。ぼくがすみませんつて謝つたのは、芋畑を荒らしたことじゃないんだ」

ぼくは、雨戸の上でうめいていた伍長の姿を思い出した。

「③貴重な飛行機を失つて、ぼくだけが生き残つてしまった」

伍長はまた海を見た。

「昨日、一緒に出撃したみんなは沖繩に辿りついて突入している。ぼくも昨日、みんなと一緒に死ぬはずだったのに。死んで神になるはずだったのに」

伍長は叫ぶようにそう言つと、頭を抱えた。

胸で人形が大きく揺れた。

ぼくたちも黙りこんだ。

波の音と鳥の鳴き声が沈黙を埋めていく。

「ここにいれば？」

カミがぼつりと言つた。伍長ははつと顔を上げた。

「もうヤマトウに戻らないで、ずっとここにいれば？ 戦争が終わるまで隠れていれば？」

思いきつた言葉に、ぼくはまじまじとカミを見た。カミを見る伍長の顔はわからない。

いきなり伍長はわらいだした。

「きみはお母さんにそっくりだね。きつときみはいいお母さんになるよ」

わらつて、わらつて、目尻から流れた涙を拭つた。

「④生きててよかった」

わらいながら、そうつぶやいた伍長は、もう、（ ） じゃなかった。（中略）

「またいつか、この砂糖をいただける日があるといいのですが」
最後に出されたサタで、お茶を飲みながら、伍長は言つた。

伍長がカミの家を後にすると、カミのあまがトーグラで泣いていた。

「ヤマトウに帰つて、また特攻に行かされるんだろうねー。かわいそうにねー、かわいそうにねー」

あまはいつまでもくりかえしていた。

あじは怒つた顔をしてあまをなぐさめていた。

「戦争だから、しかたがないねー」

あじはくりかえした。

「しかたがないねー」

ぼくはシマの外れまで伍長を見送つた。

みんな疎開して、シマには伍長を見送る人しかいない。置いていかれた鶏たちだけが、こつこつこつ鳴きながら、我が物顔で歩きまわっている。

ぼくはガジュマルの木にのぼつて手を振つた。カミは「気根の垂れ下がる木の下で伍長を見送つていた」。

伍長はふりかえつて、手を振り返してくれた。ぼくは木から落っこちそうになるくらい、大きく手を振つた。でも、カミは木の下でじつとして、手を振らなかった。

伍長はもうふりかえらず、そのまま歩いていって、白い道の先に消えた。

伍長を見送りに集まつてきた人たちは、空襲を恐れ、すぐに砂糖小屋へ戻つていった。

ぼくはシマの中を通りながら、鶏が生んだ卵を拾つた。夜、鶏が上がつて眠るトウブラ木の下にも、卵が生んであった。ぼくはあたたかい卵を拾つては、ズボンのポケットに入れた。雛を連れて歩いている鶏もいる。

「なんで手を振らなかったの？」

砂糖小屋への道で、先に行ったカミに追いついて、訊ねた。

カミはうつむいて黙っていた。

「せつかく伍長さんが手を振ってくれたのに」

ぼくが「c」言つた言葉が風に飛んでいって、ずいぶんたつたころ、や

つとカミは口を開いた。

「あちやが出征するときも、イチミーが予科練に行くときも、わたし、手を振つたの」

カミはぼくを見ないで話した。

「わたし、手を振つて、あちやとイチミーを呪つてしまった。伍長さんのもらった人形と同じことをした。あのとき、あちやとイチミーに、がんばつてね、お国のためにがんばつてきてねつて、言つてしまった」

「それは」

ぼくはさえぎつた。

「みんな言うよー。ぼくも言つたよー」

カミは首を振つた。

「みんな言う。わたしも言つた。あたりまえだと思つてた。きつと、伍長さんを見送つた女学生もあたりまえだと思つてた。わたしはあちやとイチミーに呪いをかけた。わたしは手を振つて、送りだした。わたしはをうない神なのに。それで、ふたりとも、帰つてこなかった」

カミはぎゅつとごぶしを握つた。めずらしく、水桶もきびの束も、ナークも抱えていない手だった。

「もう手は振らない」

カミの握りしめたごぶしの中には、何もなかった。

ぼくは思わず、その手に、拾つた卵をひとつ握らせた。

「何よ、これー」

カミはわらいだした。

「もうひとつ、あげるよー」

ぼくはもう片方の手にも、まだ生あたたかい卵を押しこんだ。カミは両方の手に卵をひとつずつ握つて、わらつた。

ぼくもわらつた。

カミがわらつてくれるだけで、ぼくはそれだけでよかった。

（中脇初枝『神に守られた島』）

注 1…カミのおじいさん 2…「ぼく」たちの暮らす沖永良部島に不時着した特攻隊員

3…「ぼく」の友達の子 4…カミのお兄さん、じゃーじやの孫。特攻で亡くなっている。

5…悪く言うこと 6…国を乱す者 7…飛行機の種類

8…戦時中に女性たちによって構成された、国家のためにつくす集団

9…飛行機の種類 10…沖永良部で陸軍陣地が置かれた場所

11…ガジュマルの、枝から下がった根っこ 12…海軍飛行隊の練習生

13…カミの弟

問一 □ a～cに入る適当な言葉を次の中から選び記号で答えなさい。

ア 非難がましく イ つつかえつつかえ ウ 優しく エ 淡々と

問二 — 線部①とありますが、この時のじゃーじやの気持ちを説明しなさい。

問三 — 線部②から分かる、当時の戦争の状況を説明しなさい。

問四 — 線部③・④とありますが、このように言う伍長の気持ちはどのような変化したのでしょうか。くわしく説明しなさい。

問五 （ ） にあてはまる三文字の言葉を、問題文中から探して書きなさい。

問六 — 線部のような様子であったカミは、伍長と別れる時には、どのように変化しましたか。くわしく説明しなさい。

問一	問二	問三	問四	問五
a	A			
	B			
b	す			
c	e			

問一	問二	問三	問四	問五	問六
a					
b					
c					